



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

カタール・シリア関係

(23日付ハヤート紙)

カタールの7月23日付ハヤート紙は、シリア政府系ワタン紙を引用し、カタールによる駐ダマスカス大使召還の背景について報じた。カタールが、シリア政府とシリア反体制派間の仲介を申し出ていたものの、シリアのバッシュール・アサド大統領がこの仲介を拒んだ結果、両国間関係が悪化したと報じた。概要は以下の通りである。

1. シリア当局は、シリア外務省に通報を行うことなく、カタール政府が駐ダマスカス・カタール大使を召還したことは、「明らかな挑発行為」であるとした。在ダマスカス・カタール大使館に対する襲撃は、在ダマスカス仏国大使館・在ダマスカス米国大使館に対する襲撃よりもかなり程度の低いものであり、仏国・米国が大使を召還していない中、カタールの対応は不相应であるとしている。
2. カタールは、シリアにおけるこの度の危機勃発の当初から、シリア政府に対し、同政府と反政府派との間の仲介を申し出ていた。しかし、シリア政府は、諸外国による内政干渉を拒む立場から、この仲介を受け付けなかった。シリアのバッシュール・アサド大統領は、自身が改革の実行に真剣であることをハマド首長に伝え、同首長はこれをオバマ米大統領に伝えた。
3. カタールはハイレベルの顧問をダマスカスへと派遣し、シリア政府と反政府派との間での連絡の再開に向けた協議を行ったものの、結局、シリア政府は対話の再開の前提として、諸外国の内政不干渉を求めた。
4. ある時点で、カタールとシリアの間には意見の不一致が生じ、バッシュール・アサド大統領は、カタール側が派遣した高官との会談を拒んだ。その後、カタール側は、バッシュール・アサド大統領に対し、ムスリム同胞団を含めた暫定的な政治的枠組を作ることを要求する趣旨の書簡を送ったが、シリア側はこの要請に衝撃を受け、これを拒んだ。
5. その後、バッシュール・アサド大統領はカタール側要人とのいかなる会談をも拒んだ。また、アルジャジーラは、シリア当局に対するキャンペーンを強化し、シリアの体制打倒を呼びかけるイスラム主義の反体制派を多く番組に登場させた。その結果、二国間関係は停止（タワッカファ）した。ワタン紙は、「カタール・シリア関係は見せかけの基礎の上に成り立っていたことが明らかになった。この関係は、たったひとつの嵐でもあれば吹き飛んでしまうだろう」と述べている。